「魯迅精神」考
——毛沢東の「魯迅精神」に至るプロセス

博士後期課程三年　李　選

中国の文学者魯迅は生きる間、亡くなった後も、現代中国の政治と文学、あるいは民衆にも大きい影響を与えている。毛沢東は魯迅を「現代中国の聖人」とし、魯迅の三つの特徴を挙げ、いわゆる政治的遠見、闘争精神、犠牲精神、この三つの特徴に基づいて「魯迅精神」を形づくり、「魯迅の一生、この精神は一貫したため、文芸において素晴らしい作家になった」と述べ、「魯迅精神」を学べと呼びかけた。このような「魯迅精神」は後に共産党の公式的な評価になっていて、毛沢東時代を含む、長い間に中国の民衆に受容されていた。

しかし、「魯迅精神」という言葉はいつから作り出したのか、どういう意味でどんな背景において語られて、あるいは解釈されたのか、そしてどうやって毛沢東の「魯迅精神」に至ったのか、これらの問題に未だに研究されていなかった。本研究の目的は、「魯迅精神」の意味を解明し、毛沢東の「魯迅精神」に至るプロセスを明らかにすることである。これによって、中国における「魯迅」の受容の全容を明らかにすることにつながり、意義があると考える。「魯迅精神」の原点をたどって、「魯迅精神」の抽象化、政治符号化した過程を分析し、毛沢東の意図と「魯迅精神」の必要性をあわせて検討していきたい。